

河鍋暁齋筆「地獄極楽めぐり図」に見る転換期の追善供養 —法隆寺天保出開帳、極楽行き列車、そして五代目尾上菊五郎—

曾田 めぐみ (大阪大学)

幕末から明治に活躍した絵師、河鍋暁齋(1831—1889)による「地獄極楽めぐり図」(静嘉堂文庫美術館)は、暁齋の有力なパトロンであった日本橋の小間物問屋、勝田五兵衛の娘田鶴が明治2年(1869)に14歳で夭折した翌年、一周忌の追善供養に合わせて制作されたもので、現状は全40図からなる画帖である。

その内容は、田鶴が阿弥陀如来と共に冥界の盛り場を楽しみながら極楽往生を遂げるというものだが、現状の図版順に従って物語を読み進めていくと展開に矛盾を感じる点が多い。加えて本紙に紙継が見られることから、当初は絵巻であった可能性があり、画帖装に変更する過程で各図の配列に混乱が生じたのではないかと思われる。画面配列の再検証は別の機会に述べたいが、本発表では、本来の図版順へと再構成する過程において浮かんできた、幕末明治という時代の転換期を反映する図様と、そこに込められた追善の意図を解明する。

まず、第1図に描かれた和鏡の天人は、天保13年(1842)に江戸で行われた法隆寺出開帳時に発行された歌川国直筆『御宝物図絵』の「摩耶夫人及び天人像」を直接の典拠にしていることが確認出来る。加えて暁齋の最初の師、歌川国芳も「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」(推定天保13年頃)に同じ出開帳で出陳された法隆寺伎楽面を、妖怪として登場させていることを指摘したい。奈良の古代宝物の「かたち」が、遠く離れた江戸の絵師を刺激し、新たな着想を与えたことは非常に興味深い。以上を踏まえ、摩耶夫人に付属する天人が本図に転用された理由を、田鶴追善との関わりから考察する。

次に第37図に描かれた列車を見ると、御輿や屋形船にも似た客車の後方に煙突が備え付けられていることから、暁齋は列車に関する知識が乏しかったのではないかと指摘されてきた。しかし、嘉永7年(1854)にペリー提督より幕府へ贈呈された小型蒸気機関車を報じる瓦版の図様は、本図の奇抜な客車と近似している。同図に描かれた人力車や電線も列車と同様に文明開化を象徴するモチーフであり、新奇な文化をあえて少女の追善供養に取り入れたことの意味を考えたい。

最後に第23図の扇面に描かれた歌舞伎役者に注目したい。この役者はこれまで八代目市川団十郎だと解釈されてきたが、実は五代目尾上菊五郎であり、さらに勝田家は菊五郎の有力な贔屓筋であったことが文献資料から明らかとなった。本作品全40図中の12図に菊五郎を示す紋が確認され、疑的ながらも田鶴と菊五郎の婚礼を示唆する図様すら描かれている。施主である勝田家と暁齋は、菊五郎に対する田鶴の幼い恋心を画中に実現させることによって、追善供養の意味を深化させたと考えたい。

ここに取り上げた問題は一部に過ぎないが、夭折した少女に捧げたこの小さな作品をつぶさに読み解くことで、幕末明治の転換期に生み出されたモチーフが、暁齋という優れた絵師によって重層的で豊穡なイメージへと昇華されたことを検証したい。